

周岐来』などの研究がある。

では、江戸期、十七・八世紀に長崎に来ていた中国人医師たちには、どのような者がいたのか。主なものを掲げると次の通りである。

陳明德、王寧宇、僧澄一、戴曼公、僧化林、盧艸碩、陸文齊、沈燮庵、吳戴南、陳振先、朱来章、朱子章、周岐来、趙涇陽、李仁山、(馬医劉経先。胡兆新、楊西斎、陸品三)などがある。

これらの医師たちが来日した理由の一つに幕府の招聘によるものがある。また、中国の医書の輸入を求めるなど、当時の中国医学に対しての幕府および、一般人においても、要請のあったことが知られている。

これらの来日の背景については、また、中国側の事情も考慮せねばならない。

中国の医学に端を発したとされる本邦の医学が、西洋の医学への移行期において、来日していた明・清の医師たちについて概要を試みることにする。

(横浜市立大学医学部医史学教室)

R・オウエンの歯の硬組織名称の 命名補遺

本間 邦 則

歯の硬組織の構成について、イギリスの比較解剖学者 Richard Owen (1804-1892) は「歯の主要部を形成するところを bone of tooth または tooth bone (歯骨) と称しているが、そのかわりに dentine (象牙質) という用語を提案する。第二の組織として Caementum といわれ、J.R. Tenon (1724-1816, フランス) により Cortex osseus 」、また R. Blake (1798年頃、アイルランド) により Crusta petrosa と名づけられているのを cement (セメント質) と呼び、象牙質とセメント質との間に存在する第三の組織は Encrustum, Adamas あるいは Substantia vitrea などと称されているが、enamel とすべきである」と述べている。そして dentine の用語はオウエンによってつくられたもので、一八四〇(天保十二)年に歯の硬組織の名称は

統一されたものである。

歯の主要部を形成する組織は、象の牙が特徴ある形態を
しており特有の構造をしているところから、ラテン語の
ebur (象牙) に由来する ivory と呼んでいた。しかしドイ
ツの解剖学者は Zahnbein, Knochensubstanz, Zahnsub-
stanz などと称することから、これを英訳して bone of tooth
あるいは tooth-bone, bony part of tooth, tooth substanz
などと呼んでいた。それでオウエンはラテン語の歯の意味
の dent (is) と化学成分をあらわす ine (また支配の意も
ある) とから dentine の用語をつくり、形容詞として
dental を用いることを提唱した。

エナメル質については、すでにイギリスの J. Hunter
(1728-1793) は「歯の外表をつつむ部分」を enamel と呼
んでいることから、すでに十八世紀後期にはこの名称は定
着していたものと思われる。しかし、Encrustum あるいは
Adamas などとも呼ばれていたため、オウエンは enamel
に統一呼称した。

セメント質についてはフランスの眼科医であり、病理学
者としても知られる J.R. Tenon が一七九七 (寛政九) 年

に「皮質性の骨質 Cortex osseus」と報告したのが初めて
であろうといわれている。またフランスの古生物学者 C.
Cuvier (1769-1832) も記載しており、一八〇三 (享和三)
年に「歯根部はエナメル質ではなく、うすい黄色の層で覆
われており、一般に角質と呼ばれている」と述べている。
オウエンは歯を顎骨に結合される意味から cement と命名
した。

わが国では、田口和美の『解剖攬要』(明治十年刊) に
は珞瑯質、象牙質、白堊質とあり、高山紀齋の『保齒新論』
(明治十四年刊) には珞瑯質、牙質、白堊質と記載されて
いる。おそらく明治十(一八七七)年頃よりこれらの用語
は使用されたものと思われる。

(日本歯科大学新潟歯学部)